

草庵仏教

第173号
(発行日)
2004年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール:
kimyou3@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

真宗問答 ⑤ 釈尊の出世本懐

J 「仏陀釈尊はどういう因縁で
仏説無量寿経をお説きになった
のでしょうか」

D 「それは大事なことです。釈
尊には一二五〇人のお弟子がお
られたと伝えられています。し
かし、これらのお弟子方はみな
出家者です。一般の在俗の方は
おられません。ですから、出家
のすぐれた弟子たちだけがさと
りを実現して迷いの世界から離
れることができたとしても、そ
の他大勢の在俗の人たちは、さ
とりへの道から取り残されたま
まなわけです」

J 「では、在俗の人の中で、さ
とりを開きたいという願いを起
こした人に対して、釈尊はどう
おっしゃったのでしょうか」

D 「もしさとりたいのなら家族
と離れて出家修行しなさいとお
っしゃるほかはなかったわけ
です。けれども、出家できる条件
はかぎられますから、出家でき
ないでいつまでも在俗の生活を
せざるを得ない多くの人たちは
さとりの道の外に置かれてい
たといえましょう」

J 「出家できるような条件とは」
D 「まずは本人が健康な成人で

なければなりませんし、養われ
なければならない子供がいては出家は
できません。もちろん、親とも
別れ、時には妻とも夫とも別れ、
しかも財産の相続権も放棄する
という強い決意がなければなり
ません。出家するにはこのよう
な条件があります」

J 「そうすると、出家して仏道
修行ができる人は多くはありま
せんね」

D 「そうです。ですから、それ
以外の大多数の人たちはいった
いどうすれば苦しみの生から解
放され、さとりの道を歩むこ
とができるか、これは釈尊が心
の底に持ち続けておられた問題
ではなかったのでしょうか。なぜ
なら、釈尊の慈悲は、全てのい
きとしいけるものを救いたいと
いうお心ですから」

J 「釈尊は、万人が救われる道
はないかという課題を心の底に
もっておられたのですね」
D 「私はそう思います」

J 「それでその課題はどうなっ
たのですか」
D 「仏説無量寿経によりますと、
ある時、世尊は奇特きとくの法に住

し、私の所住に住した」といわ
れています」

J 「それはどういう境地ですか」

D 「諸仏を念じ、諸仏と念じあ
う、深い禅定であるといわれて
います。諸仏の根本は阿弥陀如
来ですから、この禅定は阿弥陀
仏を念じる禅定(大寂定弥陀三
昧)といわれています。この禅
定によって釈尊は阿弥陀仏の広
大な本願力を感得され、そこに
万人が救われる法を見いだされ
たといわれています。ここに長
年の課題に光を見いだされ、そ
の喜びで全身が光り輝かれたの
です。それをそばにいたお弟子
の阿難が見て驚かれたのです。
それで阿難は釈尊に

《世尊、今日は喜びに満ちあふ
れ、お姿も清らかで、そして輝
かしいお顔がひとときわ気高く見
受けられます。まるでくもりの
ない鏡に映る姿が透きとおって
いるかのようでございます。そ
して、その神々しいお姿がこの
上なく超えすぐれて輝いておい
でになります。わたしは今日ま
でこのような尊いお姿を見たて
まつたことがございません。

(乃至)なぜ世尊のお姿がこの
ように神々しく輝いておいでに
なるのでしょうか》(大経)
と問いました。そうすると釈尊
は

《阿難よ、そなたの問いはたい
へん結構である》(大経)
とその問いをお喜びになりました。
そこで釈尊は

《今のそなたの問いは大きな利
益をもたらすもので、すべての
天人(神々)や人々をみな真実
の道に入らせることができるの
である》(大経)

と仰せになって、すべての人々
に大きな利益となり、真実の道
に入らせることのできる法を説
き始められたのです。それが仏
説無量寿経が説かれるようにな
った因縁です」

J 「全ての人が真実に入る法、
すなわち救われる法を釈尊は見
い出されてご自身が非常に喜ば
れたので、それが全身からの輝
きとなって表れたのですね」
D 「そうお聞きしています」
J 「そこで在俗の人たちも真実
に出会うことのできる道を説き
始められたのですね」

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日 (水)

午後二時始まり

ご講師 栖雲 幸雄 師

D 「ええ。出家・在家といく区別のない、全人類が等しく救われる法、そういう意味では大乘の中の大乗といふべき法を説き出されたのです。それゆえ、聖人は仏説無量寿経は（出世本懐の経）と仰せられます」

*

J 「出世本懐の経典とはどういう意味ですか」

D 「釈尊がこの世に出現された（出世）、その本懐・本望・目的はこの経典に教示された法を説かれるためであるという、そういう経典のことです。仏説無量寿経は、釈尊がこの世にお出ましになった本懐、そのお心を説かれた経典だといわれています」

J 「よく法華経が出世本懐の経典だと聞くことがあります、どうなんですか」

D 「天台宗や日蓮宗ではそう言います。ことに近年、創価学会は法華経こそが出世本懐の経典である。この経典が仏法では最も尊重すべき経典である。だからこの法華経をさしおいたり、他の経典をより尊重するならば、それは謗法の大罪を犯すことになる、とまで言うようですよ」

J 「創価学会の人たちがそれほどまでに出世本懐を主張する根拠は何ですか」

D 「彼らが、法華経が出世本懐の経典と主張するのは、無量義経という経典に説かれている言葉を根拠にしています」

*

J 「無量義経はどういう経典ですか」

D 「この経典は法華経を説くに先立って説かれた経典といわれ、法華経の開経といわれてきました。その中に釈尊が「四十余年いまだ真実を顕さず」（四十余年未顕真実）と説き、三十五歳で

さとりを開いてから今まで説いてきた法はまだ真実を説いていない、と言われ、そしてこれから説くところの法華経こそ真実を完全に説きあらわすものであると予言して、法華経を説かれ始めたというのです。だから法華経こそ出世本懐の経典だと主張するのです。ですから、釈尊が入滅される八十歳近くになって初めて真実を完全円満に説いたのが法華経だから、それ以外の経典は真実を不十分にしか説かれていない。だから法華経を第一にしないのはもつてのほかであって謗法罪に当たると主張するのです」

J 「それは正しいのでしょうか」

D 「ところが近年の経典研究の結果、この無量義経は法華経や大無量寿経のようにインドでできた経典ではなくて、中国でできた経典、いわば偽経であるといいますが、大方の見方になっていくのが、法華経の開経といわれる無量義経が説かれたので、それから法華経が説かれたのではなくて、まずインドで法華経が説かれ、それが中国に伝わっ

て、その法華経を権威づけるために制作されたのが無量義経であるというのが今日の大方の仏教学者の見解です」

J 「そうすると、もともとの法華経には開経などという経典はなかったのですか」

D 「そうです。だから無量義経を盾に法華経だけが出世本懐の経典だという根拠はゆらぐわけです。ただ法華経は大乗経典を代表する大変優れた経典であるということには仏教界では定説となつています」

*

J 「では親鸞聖人が仏説無量寿経を出世本懐の経典とお示しになったのは、どういうお心からですか」

D 「それは他の経典と比較研究して大経だけが出世本懐といわれるのとは違いました。それは、万人を平等に救われる法がこの経典に説かれているから、出世本懐の経典とされたのであつて、もし他にそういう内容の

経典があるならそれも出世本懐の経と申されるのではないのでしょうか。現に阿弥陀経にも出世本懐のお心を聖人は見ておられます。いわば、万人を救う普遍の法が説かれている経典だから、出世本懐の経といわれるのです。そういう意味では、出世本懐の経典は一つだけに限る必要はないといえます」

*

J 「釈尊は阿難の問いを縁として仏説無量寿経を説き始められたのですか」

D 「そうです。釈尊は阿難に対して

《阿難よ、そなたの問いはたいへん結構である。そなたは深い智慧と巧みな弁舌の力で、人々を哀れむ心からこのすぐれた質問をしたのである。如来はこの上ない慈悲の心で迷いの世界をお哀れみになる。世にお出ましになるわけは、仏の教えを説き述べて人々を救い、まことの利益を恵みたいとお考えになるからである。このような仏のお出ましに会うことは、はかり知れない長い時を経てなかなか難しいのであつて、ちょうど優曇華の咲くことがきわめてまれである。今、そなたの問いは大きな利益をもたらすものである》

と大経には説かれています。これから説く法は人々に真実の利益を

を

平成17年度御年忌年回表

1	周忌	1	6	年	亡
3	回忌	1	5	年	亡
7	回忌	1	1	年	亡
1	3	平	5	年	亡
1	7	平	1	年	亡
2	5	昭	6	年	亡
3	3	和	4	年	亡
5	0	昭	3	年	亡

（25回忌をせず23回忌と27回忌とする場合は50回忌以後は50回忌）

《念仏座談会変更》

11月6日→→11月2日
11月20日→→11月12日

*都合により、この11月のみ「念仏座談会」を上記の通りに変更いたします。



糸鞋 (C)SHOGAKUKAN INC.

益を与え恵むところの法であると釈尊が仰せになつているのである。聖人はこの部分を『教行信証』の教巻のはじめに《釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり》と経文の原文のままに述べておられます。それは仏説無量寿経は私たちに真実の功德を与えて救おうという（恵みの経典）であるとの思召しです。このようにしてこの経典は始まり、釈尊は法蔵菩薩の物語を説き出されるのです」（以上）

歎異抄 第十六章第四講

すべてよろずのことにつけて、往生には、かしこきおもいを具せずして、ただほればれと弥陀の御恩の深重なること、つねはおもいだしまいらすべし。しかれば念仏ももうされそうろう。これ自然なり。わがはからわざるを、自然ともうすなり。これすなわち他力にたまします。しかるを、自然ということの別にあるように、われものしりがおにいうひとのそうろうよし、うけたまわる。あさましくそうろうなり。

(歎異抄第十六章より)

現代語訳(浄土への往生については、何ごとにもこざかしい考えをはさまずに、ただほればれと、阿弥陀仏のご恩が深く重いことをいつも思わせていただくのがよいでしょう。そうすれば念仏も口をついて出てまいります。これが、「おのずとそうなる」ということです。自分のはからいをまじえないことを、「おのずとそうなる」というのです。これはすなわち阿弥陀仏の本願のはたらきなのです。それなのに、おのずとそうなるということが、この本願のはたらきの他にもあるかのように、物知り顔をしている人がいるように聞いておりますが、実に歎かわしいことです。)

ここでは(「自然」ということが取り上げられています。この章のはじめに異義者が

「信心の行者、自然に、はらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をしましては、かならず回心すべし」

というのは、念仏を信ずる人は腹を立てたり、悪いことをしてしまったり、同じ念仏の仲間と口論したりしたなら、そのつど、申し訳なかつたと反省し懺悔することが自然にできるはずであり、すべきである、といわれるのでありましょう。ですからこの人たちが「自然に」といわれる自然とは「自然必然に」ということで、信心の念仏者は当然、こうあるべきである。腹を立てたり、口げんかしたりしたときは、ああ間違っていました、悪うございましたと、そのつど悔い改めるべきであり、当然そうあるはずであると、いわれるのでしよう。

この異義者のいう「回心すべし」といわれる回心とは懺悔し悔い改めるといふ、道徳的な色合いの強いものです。きまじめであつても、非常に窮屈な、こわばつたものです。ですからこの場合の自然は、当然こうあるはずだ、こうあつてしかるべきだという(「自然」)であり、親鸞聖人が仰せくださる自然すなわち願力自然とは違ふのである、と唯円房は批判されるのでありましょう。

*

では聖人が申されていた自然(じねん)とはどういふものかといえ、
「すべてよろずのことにつけて、往生には、かしこきおもいを具せずして、ただほればれと弥陀の御恩の深重なること、つねはおもいだしまいらすべし。しかれば念仏ももうされそうろう」
という、このようなものだと唯円房は申されるのであります。

実際、人に対して腹が立ったり、憎んだり、怨む気持ちが起こるとき、そのつど「ああこんな心を起こして申しわけない。これからは腹を立てないように気をつけよう」と悔い改めようとしても、反省した後から後から腹立ちがむくむくと湧いてくる、人を怨んだらいけないとそ

のつど反省するのですが、怨む心がなくなる。頭では「腹を立ててはいけない。人を怨んではいけない」と思っても、内からわき起こる腹立ちの感情、怨みの感情は抑えることができない。それが凡夫の実際の姿ではないでしょうか。「いけない」と思いながらも、先に先にと煩惱が起こるのです。まったく始末がつかぬものはありません。反省やら、懺悔やら、人間の悔い改めで、始末のつくようなものではありません。

であれば他に道はありません。「煩惱具足と信知して」で、煩惱具足とお知らせいただいて、「そんな心だから、私の方で必ず浄化するから、汝の心の始末は我に任せてくれよ」「我が名を称えよ」と仰せくださる阿弥陀仏の願力に我が身をゆだねて、ただほればれと「阿弥陀様なればこそ」とナムアマミダブツと出る(おまかせする)他はありません。

しかるに「お念仏しても心はもとのままで」と文句を言うのは、「まかせよ」と仰せくださる弥陀に、「いまここで始末をつけてほしい」と、阿弥陀仏に注文をつけているのであつておまかせしているのではありません。

*

この世ではこの宿業の身を抱えている限り、この身を捨てるまで煩惱は消えず、絶えることはありません。煩惱の消える

のはお浄土に生まれて、
「報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覚月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして」(歎異抄第十五章)

*

ただ不思議なことですが、「私が汝の心をきつと仏心に変えるから」と誓われた阿弥陀仏の大悲の願力を

「わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱のころもいでくべし」
で、腹立つ心が和らいでいき、とげとげしくなる心が柔らかとなつていくのです。それこそ阿弥陀仏の大悲の徳力によつてであります。すなわち願力の「自ずからなる然らしめ」(「おのずからなるはからい」)によつて、腹立ちや憎しみを止めることができなにかかわらず、それこそ大悲の願力の自然によつて、怒りで堅くなつた心がとかされていくのであります。

*

もう少し論点を広げますと、今日、道徳教育が叫ばれていますが、人間の限界と本質に立ち入つて、そこから考えないと、無理に理想的道徳的なことばかりをいへばいふほど、これによつて抑圧される人間の本性が逆に反発して表れてくることによくあります。いましめを押しつけるだけで人はいましめを守るかといふとなかなかそうはいかず、ややもすると押さえつけると返つていましめを破ろうとする衝動が突き上げてくるともいわれます。人為的な抑制から、仏の大悲の自然による抑制が人間にとつて無理のない道ではないでしょうか。

《住職つれづれ日誌》

十月二十六日。ハンセン氏病だった人たちが暮らす岡山県の^{おく}邑久光明園の方々が難波別院の報恩講に参拝され、その方々との交流会が別院で催された。ともに食事をしながら入園者の人たちのお話をお聞きした。私の隣にいたお二人の老婦人は五十年近くも入園しておられる方々で、終戦後まもなく入園したときは一部屋に十数人いて、半畳ほどのところで寝ていたとのこと。皆さんの表情は本当に明るく、いろんな苦しみや悲しみを経てこられたとはとても思えなかった。